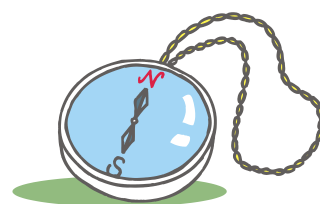


# 羅 針 盤

第 **22** 号

令和7年11月10日（月）



## ◆ 馬を水辺に連れて行けても水を飲まずことはできない

「馬を水辺に連れて行けても水を飲まずことはできない」この言葉はイギリスに古くから伝わることで、英語表記では「**You can take a horse to the water, but you can't make him drink.**」と書きます。その言葉の意味は、馬に水を飲ませてあげようと思って水辺まで連れていくことはできるけれど、水を飲むか飲まないかは馬自身が決めることであり、無理矢理に水を飲ませることはできないということです。つまり、周りにいる人たちが環境を整えて、いろいろな機会を与えて支援することはできるけれど、最終的にそのことを実行するかどうかは本人のやる気次第であるという意味です。日頃の学習活動でも同じことが言えるのではないのでしょうか。教科書やノート、あるいは、タブレットまでもが準備された学習環境が整っている状態でも、生徒の皆さん自身に、しっかりと勉強しよう、もっと成績を上げたい、といった前向きな気持ちがなければ、目の前に準備された水を飲まないのと同じで、先生から教えられたことが身につかないのは当然のことでしょう。それどころか、授業中にやる気が起こらないのであれば、無理矢理に水を飲まされるのと同じで、わからない所が増えていくばかりで、だんだんと勉強をすることが嫌になってしまうでしょう。今から80年くらい前の戦後の日本は、誰もが貧しい時代でした。子どもたちが勉強しようと思っても、なかなか勉強ができる環境をつくりだせない時代でした。そんな時代でも、一生懸命に勉強に励んで目標を達成した人もいれば、家庭の事情などで小学校を出ただけで働いている人たちもたくさんいました。ことわざの馬に喩えて言えば、当時



の子どもたちは「のどがかわいていた」ということです。だからこそ、自分の力で水辺を探し、自からの力で水を求めて、水を飲んだのでしょう。しかし、現代ではどうでしょうか。ほとんどの人が高校に進学し、学習ができる条件は全て整っているはずです。経済的な家庭の事情で進学ができないという生徒のためには、奨学金や授業料免除などの仕組みも整っています。あるいは、授業料の無償化の取り組みも進んでいます。多くの家庭では、子どもにいろいろな教材を与え、塾にも通わせもらっている人たちがたくさんいるはずです。学校だけでなく、塾でも勉強しやすい状況が十分につくられているというわけです。

でも、生徒の皆さんは、心の底から水を欲して、水を飲みたいと考えているのでしょうか。どれだけ周りが、環境を整え、頑張ったとしても、生徒の皆さん自身の意欲が伴っていなければ、「やる気を出す」ことには繋がらないでしょう。「やる気を出す」ということにおいては、周りの人に頼ることは出来ないのです。「やる気が出ないのは周りのせいだ」と言い訳をしたりしていませんか。本当にやる気を出せるのは自分自身しかいないのです。大人になったとき、自分のやりたいことは何だろう。自分のやりたい仕事は何だろう。そのためにはどういう勉強が必要なんだろう。自分がどういう勉強をしなければならぬのかといったことに気がついて、自から勉強をする気持ちを伸ばしていくことを大切に考えてほしいと思います。周りの人たちができることは限られているはずです。勉強を進めていくのは、皆さん自身なのです。ぜひ、意欲を持って取り組むことで、出来る喜びや知る楽しさを感じて、様々な試練を乗り越えていく力を蓄えていってほしいと思います。